石川さんの思い出（4）

私は昨年 8 月 18 日（日）、市大病院を退院した。月曜が退院予定であったが、気になることがあり、1 日早めてもらった。一つは『名古屋の観光力』の最終校正であり、病院からタクシーで研究室に向かい作業した。もう一つは石川班の社会調査実習である。翌日の月曜午前、ある議員のところに出来立ての報告書を持って「事情説明」に行った。この顛末は次回のレポートに記したい。

ところで、綺麗な花束の写真は何か。これには少し「わけ」がある。石川さんが入院してから、私がゼミ「代役」に勝手になり、ゼミ生たちで進めていた「自主ゼミ」に参加してきた。専門外の議論に戸惑いながら、とにかく「代役」を努めてつもりだ。そのためか？私の退院祝いに素敵な花束をもらった。研究室の窓際に飾った。

石川さんの後期のゼミをどうするか。これも私の手帳メモによると、8 月 30 日にゼミ生を集めて「意向」を聞き、それを翌日 31 日に石川さんに伝えに行った。４年のゼミ生は私のところに所属するなどである。私は退職半年前であり、なんら「役職」と関係なく、「おせっかいな教員」として振る舞ってきた。石川さんは病室あたり（たしかナースステーション）で本を読んでいたが、私の「伝言」に強い怒りを示した。私も興奮して言い返し、場所をエレベーターあたり、さらに誰もいなかった食堂に移して、しばしの「言い争い」を演じた。

ゼミを続けたいという彼の気持ちはよく分かっていたつもりだが、彼らしい言い方で私を責めてくるので、つい「けんか腰」になってしまった。いま考えると、もっと違った対応すべきと反省するばかりだ。翌日には、彼らしい「謝罪メール」が届いた。

結局、後期からは５人の石川ゼミ４年を引き受けることになった。私の最後のゼミは８人であり、大所帯にするか迷ったが、５人の石川ゼミ生たちは「分離独立」？を主張して、別々にゼミを行うことになった。ただし 9 月 26 日には、合同で卒論中間報告会を行い、恒例の當り屋さんでの｛懇親会」となったが。

石川さんの驚異的な努力により退院・復帰してから、ゼミをどうするかが再び問題になった。ゼミ生の意向を聞いてもらうと、全員が石川さんのところで卒論を書きたいという。退職を半年後にひかえ、自ら進んでゼミ担当を引き受けた身として、一抹の寂しさを感じたが、学生の「意向」を優先することにした。石川さんの病状が気になったが。

石川さんはゼミ生をこってりと指導したようで、５人ともこってりとした出来栄えの卒論を書いて卒業した。石川さんは厳しく指導するが、離れていく学生はいないようだ。ここに彼の教師としての資質、持ち味を感じる。「災後」の？石川ゼミにすこし関わることができて、私の教員生活の忘れられない「思い出」となった。

（2014 年 8 月 8 日）